

論文審査の結果の要旨および担当者	
学位申請者	徳田 良
論文担当者	主 査 平田 淳一
	副 査 芳川 浩男
	副 査 山門 亨一郎
学位論文名	Real-world Experience of Carotid Artery Stenting in Japan: Analysis of 8458 Cases from the JR-NET3 Nationwide Retrospective Multi-center Registries
	(日本の頸動脈ステント留置術の現状：JR-NET 3における 8,458 例の解析)
論文審査の結果の要旨 動脈硬化性の頸動脈狭窄症が原因で生じる脳梗塞の予防治療には、頸動脈ステント留置術(Carotid Artery Stenting; CAS)と頸動脈内膜剥離術(Carotid endarterectomy; CEA)がある。CAS は 2008 年 4 月に保険収載され、治療数は年々増加している。従って、本邦における実臨床での CAS の現状を把握することは重要である。本研究は、2010 年 1 月 1 日から 2014 年 12 月 31 日まで本邦の脳血管内治療に関する全国登録調査 Japanese Registry of Neuroendovascular Therapy 3 (JR-NET 3)のデータから、CAS が行われた症例を抽出し、主要エンドポイントを治療 30 日後の日常生活自立度(modified Rankin Scale)、副次エンドポイントを治療の技術的成功、治療 30 日以内における有害事象の発生、術後 30 日以内における治療に関連した治療合併症の発生として評価した。同期間で合計 9,207 例の CAS 実施例が登録された。ステントの種類が不明もしくは未入力であった 153 例、治療対象疾患名が頸部頸動脈狭窄ではなかった 502 例、急性再開通の一環として施行された 3 例、データ利用が困難であった 91 例を除外し、8,458 例を後ろ向きに解析した。全 8,458 例中、8,042 例 (95.1%) が日本脳神経血管内治療学会の認定専門医により治療された。全 8,458 例中、手技成功例は 8,417 例 (99.5%)であり、臨床的に有意な合併症を呈したものは 198 例 (2.3%)であった。多変量解析の結果、臨床的に有意な合併症に関連するリスクファクターは症候性病変 [odds ratio (OR), 1.91 per year ; 95% confidence interval (CI),1.23-3.00 ; p=0.003] と頸動脈エコーにおける低輝度病変 [OR, 1.85 ; 95% CI, 1.21-2.84 ; p=0.005] であった。一方、closed-cell stent は臨床的に有意な合併症のリスクを低減した [OR, 0.53 ; 95% CI, 0.35-0.79 ; p=0.002]。初期のランダム化比較試験においては CEA に対する CAS の非劣性が証明できなかったが、その後、3つの試験で非劣性が示された。しかし、周術期の脳卒中が CAS に多いとする報告が多いため、欧米では現在でも CEA が主流となっている。しかしながら、本研究成果は、我が国においては、CEA よりも CAS の合併症や死亡例が低く、安全性にも優れており、さらに、症候性病変や頸動脈エコーにおける低輝度病変のリスクファクターを予め評価することにより、治療成績がさらに改善される可能性が期待される成果であり、将来の頸動脈狭窄症治療に大きく寄与するものであり、学位授与に値すると判断した。	